

資質・能力を育む 授業づくり

新学習指導要領では、「資質・能力の育成」が謳われている。

これからは、学校全体で育みたい「資質・能力」を定義し、カリキュラム・マネジメントを通して、計画的に身につけたい資質・能力を各授業で焦点化して養成していくことが必要となる。

そこで今号の特集では、「資質・能力の育成」という観点から、

これからの授業のあり方を、有識者からのアドバイスや先行事例を通して考えていきたい。



入試で問われる力も変化してきている

モデル問題例2

問 転勤の多い会社に勤めているサユリさんは、通勤用に自動車所有しており、自宅近くに駐車場を借りている。以下は、その駐車場の管理会社である原パークとサユリさんが締結した契約書の一部である。これを読んで、あとの問い(問1～3)に答えよ。

駐車場使用契約書

貸主 原パーク(以下、「甲」という。)と 借主 ○○サユリ(以下、「乙」という。)は、次のとおり駐車場の使用契約を締結する。

第1条 合意内容
甲は、乙に対し、甲が所有する下記駐車場を自動車1台の保管場所として使用する目的で賃貸する。

(駐車場の表示)
住所 東京都新川市新川朝日町2丁目3番地
名称 原パーク第1
駐車位置番号 11番

第2条 期間
乙の使用する期間は、平成28年4月1日から平成29年3月31日の一年間とする。契約期間満了までに甲、乙いずれか一方から何等の申し入れがない時は、さらに一年間の契約が自動的に更新されるものとする。

第3条 駐車料金
乙は、以下のとおり駐車料金を支払うものとする。
敷金(※注) 金20,000円
月額駐車料金 金21,600円(税込)
支払期日 毎月末日までに翌月分を支払うものとする
支払方法 甲指定の銀行口座への振込

第4条 駐車料金の改定
甲は、この契約期間中、物価の変動、経費の増加、近隣駐車料金その他の経済情勢の変動により、月額駐車料金が不相当と認められるときは、これを改定できるものとする。

実社会との
かかわりが深い文章を
題材としている。

第5条 乙の注意義務
乙は、駐車場の使用にあたって、次のことをしてはならない。
(1) この契約により取得した権利を他に譲渡又は転賃すること。
(2) 他の駐車場使用者の迷惑となること。
(3) 爆発物や危険物等、法律で禁止されているものを持ち込むこと。
(4) 甲が定める駐車場の管理規則に違反すること。

第6条 解約事由
乙に次のことがあった場合には、甲は何らの催告を要せず、この契約を直ちに解除できるものとする。
(1) 駐車料金の納期期限後、1か月を超過しても支払いがないとき。なお、その場合は、超過した1か月分についても駐車料金が発生するものとする。
(2) 前条に定める注意義務事項に違反したとき。

第7条 途中解約
契約期間中であっても、乙は甲に対して解約日の1か月前までに、甲は乙に対して6か月前までに書面により予告することによって、本契約を解約することができる。ただし、乙はこの予告なしに本契約を解約するときは、1か月相当額の駐車料金を支払うものとする。

第8条 返還義務
乙は、この契約を終了又は解約したときは、解約日の翌日から甲に駐車場を明け渡さなければならない。

(※注)敷金…土地の賃貸借に際して、賃料の支払いやその他の契約上の債務を担保するために、借主から貸主に交付される金銭のこと。

問1 駐車場使用契約を行った3か月後のある日、サユリさんのもとに、原パークの担当者から電話があった。
「もしも、原パークですが、サユリさんですか?いつもご利用ありがとうございます。現在、サユリさんには駐車料金を毎月21,600円払っていただいておりますが、このたび24,840円に値上げすることを決定いたしました。来月分より新料金でのお振り込みをよろしくお願いたします。」
サユリさんは、この突然の値上げに納得がいかないで、原パークに対して今回の値上げに関する質問をしたい。契約書に沿って、どの条文の、どのような点について質問したらよいと考えられるか。解答の文末が「～について質問する。」となるようにして、40字以内で述べよ(句読点を含む)。

場面の中で
テキスト(情報)を
的確に読み取る力や、
設問中に示された条件に従い、
目的に応じて表現する力が
問われる。

新しい傾向の記述式問題

上図は2017年5月に公表された、2020年度から導入予定の「大学入学共通テスト」*1における国語の記述式問題のモデル問題例だ。

今回の出題は、問題の素材が評論や小説などでなく、契約書などの非連続な文章で構成されていたり、それらについて会話をしている文章も登場したりと、従来あまり見られなかった形式となっている。また、問題を解くためには、与えられた複数の素材から情報を把握・整理・選択して解答を導き、それを言葉や文章にして表現する力が求められる。

*1 現在行われている「大学入試センター試験」の後継として位置づけられるテストで、これまでのマークシートのみの方から国語・数学では記述式問題も出題されることが決定している。

思考力・判断力・表現力がより問われる

これらはPISA*2や文部科学省「全国学力・学習状況調査」のB問題の内容にも通じる出題といえる。社会が大きく変化していく中、今後、入試において、このような思考力・判断力・表現力を問う傾向はますます強まると予想される。また、テスト形式での出題は難しいが、ポートフォリオ評価などを通じて主体性や協働性などを測ることもより重視されていこう。

このように、新学習指導要領で育成を目指す資質・能力は、入試改革にも大きな影響を及ぼしつつある状況だ。

*2 Programme for International Student Assessmentの略。OECD(経済協力開発機構)が15歳児を対象に3年ごとに行う国際的な学習到達度調査。

上記のような状況を踏まえて、これから小・中学校段階でそれらの資質・能力をどのように育成していけばよいか、次のページからそのヒントを探っていこう。

「すべ」を育む声かけの工夫で、授業の質を高める

日本体育大学大学院 教育学研究科長 ^{かどや}角屋重樹

子どもたちの資質・能力を育むためには、どのような視点で授業づくりを進めればよいか。長年、理科教育を中心にPISA型学力の育成を研究し、子どもたちに学ぶ「すべ(術)」を身につけさせることを提唱している日本体育大学大学院の角屋重樹教授に話を聞いた。

資質・能力をどう伸ばすか

B問題低迷の背景に「すべ」の育成の欠如

新学習指導要領で掲げられた「資質・能力」(図1)にそもそも大きな影響を与えたのは、PISA*1です。

PISAはこれまでも、文部科学省の施策や学習指導要領に大きな影響を与えてきました。国際化や情報技術の進展などにより、主体性や自己の確立、他者に考えを的確に伝える表現力などが今後ますます求められていきますが、同調査の結果から日本の子どもはそのような力が十分でないことが明らかになりました。特

に、根拠を持って自分の言葉で考えを述べる問題で、諸外国の子どもと比べて無答率が高かったのです。

そこで、文部科学省は、思考力・判断力・表現力や主体性などの育成を強化するため、2007年に学校教育法を改正し、①知識・技能、②思考力・判断力・表現力等、③主体的に学習に取り組む態度という「学力の3要素」を示しました。PISAでは「思考力・判断力・表現力」が重視されていますが、日本の学力観では「知識・技能」も重視しているのが特徴で、3要素をバランスよく育むことを目指しています。

そうした考えの下、「全国学力・学



かどや・しげき 広島大学、宮崎大学で助手、助教授を経験した後、文部省(当時)初等中等教育局教科調査官、広島大学大学院教授、広島大学附属福山中・高校校長、広島大学副理事(附属学校担当)、国立教育政策研究所教育課程研究センター基礎研究部部长、日本体育大学児童スポーツ教育学部教授等を経て、現職。著書に『新学習指導要領における資質・能力と思考力・判断力・表現力』(編集代表、文溪堂)等がある。

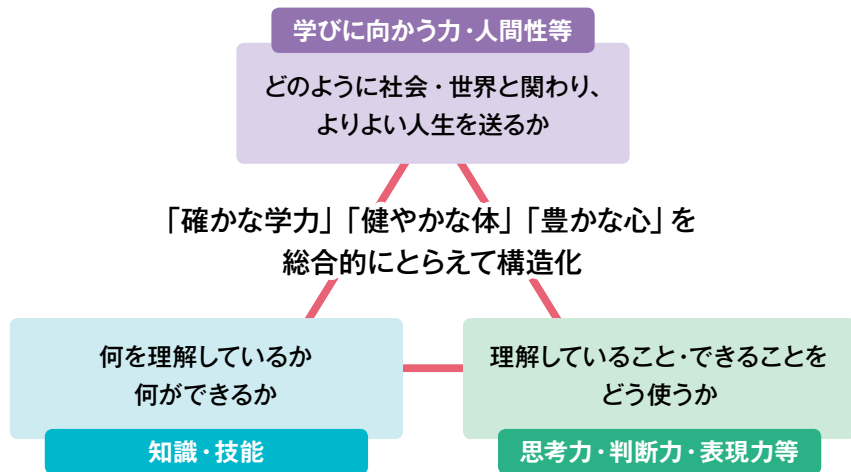
習状況調査」は、基礎的な知識・技能を測る「A問題」と、知識・技能の活用力を測る「B問題」で設計されています。ところが調査開始以降、A問題と比べてB問題の正答率が低い状態が続いており、記述式問題の無答率の高さも問題視されています。

私はこの背景に、B問題を解くために必要な思考力・判断力・表現力を身につける「すべ」を、学校できちんと育てこなかったことが、大きな要因としてであると捉えています。

「すべ」はスキルや方法とも言えるもので、それを繰り返し使うことで型が身につく、そこに自分なりの工夫を加えることで、資質・能力が育まれていくのです。

子どもには、学ぶために必要な力

図1 新学習指導要領で育成を目指す「資質・能力」の3つの柱



* 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」を基に編集部で作成。

*1 P.3 参照。

が、最初から備わっているわけではありません。例えば、授業ではよく先生が「〇〇について考えましょう」と投げかけますが、それだけではどう考えればよいのか子どもには分かりません。考える「すべ」を子どもに与えることが必要なのです。

また、資質・能力の育成においては、授業と「育てたい人間像」「そのために育成すべき資質・能力」とを一体的に捉える必要があります。

「主体的・対話的で深い学び」の手法にとかく目が行きがちですが、まずは自校の学校教育目標を立て、その達成に向けて子どもにどんな資質・能力を育めばよいのか、そして、それを各教科に落とし込むとどんな力になるのかを明確にすることが、授業づくりの起点となるのです。

思考力●指導のポイント

「比較」や「関係づけ」など考えるための視点を示す

では、具体的に資質・能力を育む授業づくりについて考えていきます。

思考力を育成するためには、子どもに考える時間を与えるとともに、考えるための視点を示すことがポイントになると考えます。具体的には、①違いに気づいたり、比較したりする「すべ」と、②対象と既存の知識を関係づける「すべ」を与える必要があるのです(図2)。

例えば、理科の授業で植物の成長について学ぶ場面では、花が咲いた朝顔と枯れた朝顔を並べて比較させ、「何が違うかな?」と問いかけて、その違いに気づかせます。比較の例としては、ほかに、満月と半月と下弦の月の形、足の速い子と遅い子の走り方などが考えられます。

次に、なぜそうなるのかを考えさせます。その際にも、ただ「原因を考えよう」と言うのではなく、「以前

図2 思考・判断・表現の「すべ」

思考の「すべ」

①比較して、違いに気づく

- 比較する視点の明確化
- 何と何を比較するのかという比較の対象の明確化

②対象と既存の知識とを関係づける

- 何と何を関係づけるのかという関係づけの対象の明確化
- どのような関係で関係づけるのかという関係づけのしかた
- 既存の知識を基に類推するなどの関係づけ

判断の「すべ」

①目的や見通しの明確化

- ②目的や見通しと実行計画を関係づけて適切なものを選択
- ③実行結果を目的や見通しと関係づけて適切なものを選択

表現の「すべ」

①目的や見通しの下に実行し、表現する内容を獲得

- ②実行結果を目的や見通しなどと対比して、的確に整理して表出

*角屋教授提供資料を基に編集部で作成。

習った〇〇はどうだったかな?」など、既習事項を想起させるような発問をすることが大切です。

このように、「これを見てどう思う?」「なぜかな?」など漠然とした言い方でなく、考える視点を提示し、何と何を比較するのか、何と何を関係づけるのか対象を明確化することで、子どもは考えやすくなるのです。

判断力●指導のポイント

目的を意識してこそ適切な判断ができる

判断力で最も重要な「すべ」は、目的や見通しを明確に持つことです(図2)。それと照らし合わせれば、取捨選択がしやすくなるからです。適切な判断ができない時は、目的を忘れてしまっていることが往々にしてあるものです。

例えば、理科の授業で実験結果を考察する場面では「予想に対して、結果はどうだったかな」と発問して、実験の目的を思い起こさせ、予想と結果を照らし合わせて判断できるようにします。子どもは実験結果に固

執しやすいので、どのような予想をして、どのような手順で実験を進めたのか、過程を振り返らせることも、適切に判断させるためには有効です。

目的意識は、社会科見学や体験学習などの際にも重要になります。学習の目的を明確に持っていないと、訪問先で何を見て、どのような情報を得ればよいのかが途中で分からなくなり、ただ楽しいだけの体験で終わってしまいかねないからです。

「何のために、何が必要か」という振り返りの習慣をつけさせることで、判断力は育まれていくのです。

表現力●指導のポイント

伝えたい内容とともに重要な、的確に整理して表現する「すべ」

表現力の育成には、2つのポイントがあります(図2)。それは、表現すべき内容を持つこと、そして、的確に整理して表現するためのスキルを身につけることです。

例えば、「表を見て、考えたことを書いてみよう」という発問では、「表を見れば、得られる情報が分かる」

ことが前提になっており、もし情報があつかめなければ書くことはできません。そこで、まず「何のために表を見るのか」という目的を意識させ、表現すべき内容を獲得させることが、表現に向けた第1段階となります。

そして、第2段階では、その内容を伝える相手や状況に応じて整理させます。表現力を高めるための「すべ」として、「最初に結論を言う」「3つの要点にまとめる」「発言の根拠を盛り込む」といった型を示し、表現のスキルを身につけさせましょう。

話を聞く場合にも「すべ」があります。ただ「話を聞こう」ではなく、「自分の考えと相手の考えはどう違うか考えながら聞こう」と伝え、比較しながら聞かせることで、より積極的に聞く姿勢を育むことができます。また、話し合いでは、相手の意見に善し悪しをつけるのではなく、話した内容が伝わったかどうかを判断させることで、「伝わる表現」「伝わらない表現」の違いに気づくことができ、表現力が磨かれていくでしょう。

知識・技能 ● 指導のポイント

目標を自分で決めさせ、適切な声かけで意欲を高める

知識・技能を身につけるために重要なのは、「自己決定」と「学習方法の指導」だと考えます(図3)。

例えば、漢字の学習で「来週テストをするから、この10個の漢字を覚えておくように」という宿題をただ一方的に課してしまうと、テストの強迫によって覚えさせるといって受け身の学習になってしまいます。そこで、発想を転換し、覚える数を子ども自身に決めさせ、学習に主体性を持たせるのです。

その際、漢字を覚えるための「すべ」を指導することが大切です。それは、「間隔を置いて繰り返す」「忘れたら

図3 知識・技能の「すべ」と、学びに向かう力の「すべ」

知識・技能の「すべ」

① 学習の目標を自分で立てる

自分で目標を設定し、計画・実行させることで、やればできるという自信や有能感を持たせる。

② 覚え方を指導する

例えば、朝・昼・夜、1週間後・1か月後・3か月後と、間隔を空けて繰り返す。

学びに向かう力の「すべ」

① できている人、よい手本のまねをさせる

優れた人の考え方や行動、手法をまねさせる。また、そのために学級全体で学び合いの風土をつくる。

② 振り返りをさせる

授業や単元の中で、自分の到達度を振り返らせ、それを踏まえて次の目標設定と、そのためにすべきことを考えさせる。

*角屋教授提供資料を基に編集部で作成。

やり直す」という2点です。朝・昼・夜と1日3回書く、一度覚えたものを1週間後・1か月後・3か月後に見直すといったように具体的な方法を示しましょう。学力に課題がある子どもは、この「すべ」を知らないために効果的な学習ができず、知識・技能が身につけていないことが往々にしてあるからです。

ここで気をつけてほしいのが、子どもへの声のかけ方です。もし1つしか覚えてこなかったとしても、「たった1つだけ?」ではなく、「よく覚えられたね」と褒めてください。他者に認められることは、自信と有能感をもたらします。そして、1日1個でも自分が決めた目標を達成して、自分の成長や変容を実感することは、次の学習への意欲につながります。その繰り返しによって、知識・技能は身につけていくのです。また、一度覚えたことを忘れてしまっても、「なぜできないの」と否定せず、「やり直せばいいよ」と励ましてください。忘れるのは当たり前で、繰り返していくことが教育なのです。

こうした指導を学力に課題を感じていたある学校で実践したところ、「全国学力・学習状況調査」のA問題

で正答率が大幅に上昇しました。

学びに向かう力 ● 指導のポイント

友だちのよい点を学び合うまねのできる学級づくりを

最後は、学びに向かう力の「すべ」についてです。

学びに向かう力を持つ子とそうでない子を比べると、前者は「学習の目的」と「それを達成するための手段(すべ)」を持っていて、逆に後者は、何をすればよいのか分かっていないことが多いようです。そうであれば、できている子が実践している方法をまねることから始めればよいのではないのでしょうか。優れた人の考え方や行動、手法を模倣することは、効果的な学習方法の1つであり、自分を高める第一歩となります。

そうすると、学級の中に「まねされる側」と「まねる側」の階層ができてしまう心配が出てきますが、ここで重要となるのが学級づくりです。教員が子ども一人ひとりの長所に光をあて、人それぞれに価値があると、違いを肯定的に受け止められる姿勢を育むことが大切です。他者とかかわり合うことで自分がよりよく変容

図4 単元・授業の構成例と声かけ例(5年生の「振り子の運動」の例)

構成例	声かけ例
<p>① 問題を見いだす</p> <ul style="list-style-type: none"> 2つ以上のものを提示し、比較して違いに気づかせる。 (例) 振れが速い振り子と振れが遅い振り子の動きを子どもたちに観察させる。 	<p>先生 何がどのように違うかな? NG「どのように思う?」</p> <p>子ども 振れが遅い方は糸が長く、重りが重い。振れが速い方は糸が短く、重りが軽い。</p>
<p>② 見通しを持つ</p> <ul style="list-style-type: none"> 予想を持たせるために、考える範囲を限定させて、子どもが発想しやすいようにする。 	<p>先生 何がそのような違いを生じさせているのかな? NG「なぜこうなるの?」</p> <p>子ども 2つの振り子を比べると、糸の長さが異なっている。だから、糸の長さが振れの速さに関係すると思う。</p>
<p>③ 解決方法を考える</p> <ul style="list-style-type: none"> 既習事項と関係づけ、類推などをさせて解決方法を発想できるようにする。 	<p>先生 今までに学んだことを用いて調べる方法はないかな? NG「解決方法を考えてみよう」</p> <p>子ども 植物の成長の条件を調べる時に、調べる条件だけに注目し、それ以外の条件をそろえて比較する実験をしたので、同じようにして調べてみたい。</p>
<p>④ 解決方法を実行する</p>	
<p>⑤ 結果を評価する</p> <ul style="list-style-type: none"> 予想と結果を比較して一致・不一致を整理したり、目的と関係づけたりして、何が分かったのかを明確にさせる。 	<p>先生 実行した結果を、条件を基に整理してみよう。 NG「どのような結果が得られたかな?」</p> <p>子ども 糸の長さが長いと振れが遅く、糸の長さが短いと振れが速い。</p> <p>先生 実験結果と予想した結果を比較すると、どのようなことが言えるかな? NG「何が言えるの?」</p> <p>子ども この実験結果は、糸の長さが振れの速さに関係するという予想と一致した。</p>
<p>⑥ 活動を振り返る</p> <ul style="list-style-type: none"> 問題が解決できたのが、①～⑤を目的に照らし合わせて振り返り、整合性がなければ、それが次の課題になる。整合性があれば、その性質や規則性を確認させ、知識・技能を確実に獲得させる。 	<p>先生 今日の学習から、何が解決できて、何が解決できていないのかな? NG「何が分かったの?」</p> <p>子ども 今回の実験は糸の長さを変えて振れの速さの違いを調べただけなので、その他の条件を変えて振れの速さの違いを調べる必要があると思う。</p>

*角屋教授提供資料を基に編集部で作成。

できると実感させることが、学び合いの風土づくりに結びつきます。

特に、小学校低学年はまねをすることが好きですから、人の話をきちんと聞く姿勢を身につけさせましょう。そうすることで、安心して発言できる場を築くことができ、学び合いの

効果をより引き出すことができます。低学年から学び合いのよさを経験すれば、中学年以降の学びの質にも大きな影響をもたらすでしょう。

さらに、1コマの授業や単元の中で、授業の目標に照らして自分がどこまでできたのかという振り返りを

させることも重要です。その上で、次の目標を設定させ、そのために何をすべきかを考えさせることが、次への学習意欲につながります。

これら「すべ」を育む授業の流れと声かけの例をまとめたのが図4です。このような探究的な学びは、すべての授業で実現できるものではありませんが、適切な題材を選んで単元の中に組み込み、子どもが「すべ」を用いる場面を意識した授業にしていってください。

教育委員会へのアドバイス 「すべ」にまで落とし込んだ 授業モデルを学校に示す

授業改善に向けては、ここまでお話ししたような「すべ」を子どもたちがつかむために、先生方が目指す授業を実現できるよう支援することが大切です。教育委員会では、各校に向けて「すべ」にまで落とし込んだ授業モデルを示しているかどうか、今一度見直してみてください。

私が授業研究でかかわっている川崎市立東菅小学校では、ベテランの先生が2年の年月をかけて授業を大きく変えることができました(P.14～17参照)。「すべ」を言葉としてはすぐに理解できても、具体的に授業に落とし込むまでが大変です。東菅小学校のケースでは、授業を変えて子どもに変容が見られたことで、コツをつかんでいったようです。

授業は、子どもの変容＝成長を目指して行うものです。よく「主体的・対話的で深い学び」の「『深い学び』とは何か」が議論されますが、私は授業前と授業後の子どもの様子を比較して、どれだけ変容があったかが「学びの深さ」につながるのだと考えています。先生方には、そうした子どもたちが変容する授業をぜひ目指していただければと思います。